

多施設・多職種が参加する 遺伝性消化管腫瘍診療ネットワークの構築

山田 敦 ●京都大学 医学部附属病院 腫瘍内科 特定准教授



京都大学医学部附属病院における遺伝性消化管腫瘍診療連携のメンバー

1. 背景と目的

遺伝性腫瘍は、生殖細胞系列における遺伝子の病的バリエーションが原因となり高率に腫瘍を発生する疾患群である。代表的な遺伝性消化管腫瘍であるリンチ症候群や家族性大腸ポリポーシスを含む多くの遺伝性腫瘍では、定期検査や予防的治療ががんによる死亡の抑制に有効と考えられるため、遺伝性腫瘍の患者を発見して適切な管理を行うことが極めて重要である。最近では、進行がんに対する治療薬選択目的で行うマイクロサテライト不安定性検査やがんゲノム検査の結果から遺伝性腫瘍の可能性が疑われる症例も増えており、日常診療の中で遺伝性腫瘍に関する臨床的対応を要する機会が増加している。しかし、消化管領域においては、遺伝性腫瘍の認知度が医療者の間でも低いのが現状であり、遺伝性消化管腫瘍に対する適切な対応が可能な施設は限られている。

京都大学医学部附属病院では、多診療科が協力して多職種を含む遺伝性消化管腫瘍診療の連携体制を確立してきた。本活動では、このような院内の診療連携を発展させて、多施設での遺伝性消化管腫瘍診療ネットワークを構築することを目的としている。

将来的には全国的な診療ネットワークを形成して、遺伝性消化管腫瘍に関する専門的な診療を必要とするより多くの患者に提供可能な体制を確立することを目指している。

2. 取り組みの方法

京都大学医学部附属病院のがんゲノム医療連携病院を中心に遺伝性消化管腫瘍診療ネットワークへの参加を呼び掛け、参加希望施設を対象にアンケートを実施し、遺伝性消化管腫瘍に関する診療実態や問題点を共有する。その上で、多施設の医師、認定遺伝カウンセラー、看護師などが参加して症例検討を行う「遺伝性消化管腫瘍カンファレンス」を立ち上げ、定期開催する予定である。また診療ネットワーク内での教育講演会の開催や日本遺伝性腫瘍学会・学術集会、学会主催教育セミナーへの派遣を通して、医療者を対象とした専門的な教育を進める。さらに患者向けパンフレットを作成して多施設で共有することにより、診療ネットワーク内での遺伝性消化管腫瘍患者に対する説明や診療の標準化を図る。

3. 期待される成果

本活動では、専門病院で実施している遺伝性消化管腫瘍に関する診療体制を地域全体、さらには全国的に均てん化することを最終的な目的としている。助成期間中には「遺伝性消化管腫瘍カンファレンス」の立ち上げ、医療者に対する専門教育、及び患者向けパンフレット作成などを推進することにより、遺伝性消化管腫瘍に対する専門的医療が提供可能な診療ネットワークの礎を築くことが期待される。